

Title	教養部図書室について
Author(s)	
Citation	静脩 (1970), 7(2): 5-5
Issue Date	1970-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/36596">http://hdl.handle.net/2433/36596</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

# 一言・ふたこと

現在の大学図書館が色々な意味で改革される必要がある。というのは、誰も異論がなからう。とりわけ教養部図書館などは、明治30年の建築で、トイレもくみとり式、封鎖の時はバキューム・カーが入れなくて、職組支部に話が持ちこまれたこともある。近く新築されるという話が持ちあがっているが、そのこと自体は喜ばしいことである。

もっとも、「改革」が単に建物・設備の問題にとどまらぬことは言うまでもないことで、何を基準にして改革が行なわれたらよいか、この際みんなで考える必要がある。というのは、現在、口を開けば「合理化」「近代化」が語られるが、図書館を「近代化」「合理化」することが、文部省や当局の管理運営を能率的にするのを主眼に行なわれるなら、それは

「改革」とは？

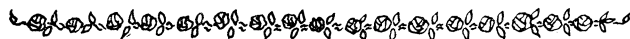
田中 礼

本当の意味での改革とは言えまい。いわゆる「中教審路線」が大学の自治・学問の自由に

暗い影を投げかけている今日、改革にあたっては、何よりも、学生の要求、研究者の便宜、図書館員の希望、勤務条件などの問題が基本にすえられなくてはならないだろう。

教養部について言えば、研究・教育機関としての教養部の任務に本当に応え得る図書館とはどういうものか、ということが、みんなで考えられなくてはならない。管理運営・教育・研究をバラバラに切りはなす動きが色々なところに出てきているが、教養部図書館がそういう動きにまきこまれないよう、教養部の一員として見守りたく思っている。

(教養部・助教授)



そもそもこの文章を書く羽目になったのは現在、音楽研究会がBOXとして使用している新徳館を新しい図書館に建て直すという話を聞き、それはわれわれ音研の者にとってはたいへんだと、図書館へ聞いてみたら「それについては知らない」とのことで、逆に何か書いて欲しいと頼まれたわけです。現在の木造平屋の図書館は本こそ10万冊を超えるということですが、やはり図書館というにはあまりにお粗末です。教養部の学生数からいって実際に利用する人の数はほんとに少ないと思いますが、それも設備の点からいえば当然かもしれません。昼休みなどすわる場所

教養部図書室について

Y. K.

物全体も、もっと明るいものでなかったらとても本を読んだり勉強するムードではないように思います。でも中には今の建物のなんとなく田舎びたところをよいと思う人がいるかもしれません。

それから現在の図書利用のシステムについていえば、1冊を1週間では不便であり、検討すべきです。冊数と期間を改善すればもっと利用がふえると思います。でも、どうやら教養部の新しい図書館ができるらしいので、設備とシステムの両面でよいもののできることを期待します。

(教養部2回生・農学部)

(掛)(よ)(り) 同じ図書の所蔵冊数が少いの、特定の図書に多数の閲覧希望者が集中することが多いので、貸出しを1冊1週間としてきました。しかし差支えが起らない時は、手続を更新して借りつぎすることも出来ます。なお、多数の図書を同時に貸すよりは、1冊ずつ貸す方が、読書効率が大きいことも考慮しました。この現在の制度は随分以前から施行していますが、特にお困りの場合は、図書委員会へ申出てください。